九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

コロナ時代に於ける双方向的リアルタイム講義の将来性

山田, 久美
久留米工業大学共通教育科

https://doi.org/10.15017/4363040

出版情報：基幹教育紀要. 7, pp.53-65, 2021-02-25. 九州大学基幹教育院
バージョン：
権利関係：

コロナ時代に於ける双方向的リアルタイム講義の将来性

山田 久美

久留米工業大学共通教育科，〒830-0052 福岡県久留米市上津町 2228-66

Suggestions for the Future of Real-Time Interactive Lectures in the Age of COVID-19

Kumi YAMADA

Liberal Arts, Kurume Institute of Technology, 2228-66, Kamitsu, Kurume, Fukuoka 830-0052, Japan

E-mail: kumiyama@kurume-it.ac.jp

Received Oct. 31, 2020; Revised Dec. 17, 2020; Accepted Dec. 17, 2020

The COVID-19 pandemic was a significant turning point for the entire education world in the 2020-2021 academic year. In particular, universities are going through a period of the fundamental paradigm shift that no one has ever seen before. This paper will serve as an essential and unique record of an unprecedented attempt at personal subscriptions and interactive lectures in Webex. This discussion suggests that using Webex as a platform has a variety of advantages. In the post-pandemic new normal regime, it is essential to realize that the key to online teaching is a willingness to learn face-to-face with all students on the other side of the computer.

序

未来の我々は、2020 年 4 月−2021 年 3 月というアカデミック・イヤーを振り返った時、何を想うだろう。本稿は危機的状況を経て非対面型講義の初年度を終えようという今、リアルタイムで行ったオンライン講義の成果と知見を共有する目的で起筆するものである。

COVID−19（コロナウィルス感染症）の流行によるロックダウンで学生と教職員の姿が消えた春の学び舎は、人でない何かに支配された SF 映画の一場面であるかのように荒涼としていた。780 を超す全国の大学のほとんどが、極めて短い期間に授業方針の急転換を迫られた。ネット環境や機材の不備、種々の規約や制約に翻弄されながらも奮闘し、「学生の学びを止めない」という最初の難関を乗り越えた日本の高等教育機関の底力は評価されるべきである。

しかし、我々の真の敵はコロナウィルスであるから、今後も目に見えない相手との戦いは続く。パンデミック以前のように教室一杯の学生の面前で語る日がいつ再来するのか、いまだに見当もつかないが、現在の艱難辛苦は未来に益するためにこそある。筆者は、九州大学基幹教育科目の「学術英語 A・リセプション」、及び「学術英語 B・インテグレート」をここ数年連続で担当している。本稿が示すのは、Webex というオンライン・プラットフォームを個人で運用し、双方向、リアルタイムのコミュニケーションを取る道を拓くという、一つの可能性への挑戦の軌跡である。

Bulletin of KIKAN Education, Vol. 7, 2021
© 2021 Faculty of Arts and Science, Kyushu University

1 遠隔授業における課題：利点と欠点、今後へ向ける視点

まずは遠隔授業の実施に伴って生じた問題点の中から幾つか的を絞って取り上げてみたい。

1.1 利点その１・・・通勤通学のコスト、時間、労力減

「通学にかかる時間と交通費の悩みが消えた」、「バイク（車）が必要なくなった」、「（下宿代など）生活費が浮いた」、「家に戻ったら親が喜んだ」等々、年度初めの混乱期を過ぎた頃より、様々な学生からオンライン講義を肯定するような声を耳にする機会が増えた。某女子大学で教鞭をとる知人は、「（今後も）遠隔講義継続が望ましい」という選択項目に 9 割超の賛成が集まった結果に驚いている。服・バッグ・ハイヒールの選択やメイクに時間をかけていた女子学生の多くが、勉強に集中できるようになった現状を（意外にも）歓迎しているようだと言った。1 限または夕方の遅い時限でも、遠方に居ながら安全に受講できる、というのも理由のひとつに挙げられるだろう。物理的、時間的に通学圏外での授業対応が可能となったメリットは軽視できない。

1.2 利点その２・・・教員との心理的距離の接近

現代の学生は物心ついた時からネットに繋がっている。ゲームなどでコントローラーを扱いなれていて、紙媒体より液晶画面に映し出される世界により親しんできている者が大半である。ゆえにコンピュータリテラシーは総じて高く、Web 上で各種の操作を命じても難なくこなせる。プライベートメッセージによるチャットが可能な講義となれば、間違ったことを尋ねて他の学生から何と思われるかという不安がないため対面時に比べ質問や相談を気軽にできる。（対面授業の頃は挙手質問する者はおらず、時折数名の声が上がる程度であったことを考え合わせると）オンラインでのリアルタイム授業では学生とのやり取りが急増した事実は興味深い。教室が大きければ教員の表情が読めない場合があるのに対し、Web 画面では間近に対峙しているように感じられることを常に意識しておかねばならない。

1.3 欠点・・・充足感の欠如

遠隔講義の望ましからぬ点を挙げていけばおそらく紙幅が尽きるであろう。人と触れ合う機会がないまま時間が過ぎれば、学生側の欠乏感や孤独感は増す一方だ。これこそが見逃せない難点の最たるものではなかろうか。大学は単に講義や実験のための空間ではない。人と人とが顔を合わせ（一見学問と関係ないような話もしつつ）知の世界の奥深さに触れる、一種の「結界」である。感染リスクを最小限に抑えるために非対面講義実施や学内立ち入り規制という選択がなされたのは必然であった。だが、安全確保と引き換えに直接の指導や薫陶を受けることが叶わなくなり、学内での交友はもとより課外・学外活動、外出に至るまで自粛を余儀なくされた学生にとって、コロナ禍による知的・人的損失は計り知れないほどに大きい。孤立感を訴える学生が急増した件については新

聞でも大きく報じられたが、とりわけ友人知人の少ない新入生にとって、終わりのみえない待機ほど精神的にこたえる試練はないだろう。コロナ禍が過去の出来事になるまで耐えるしかないと忍ばせるだけでいいのだろうか。せめて同じ講義を受けるクラスメートと交流ができるチャンスを少しでも増やすことが喫緊の課題となっている。

1.4 今後への視点・・・選択可能な、最善策を探るべき理由

昨年度までは整備された環境で行われていた講義が受けられず、学内の施設もほぼ使用できないことから「授業料の一部返還や減免」を求める不満の声が上がっていることを教育担当者として常に念頭におく必要がある。大学の講義の質の確保と刷新の在りようは、これからも学生と保護者、出身高校や卒業生、就職先、即ち社会から問われ続ける。情報の受け手が孤立した状態にあって教員や友人との心的交流が思うに任せない状態が続く限り、発信者側の熱意の有無はこれまでより一層、受講者にとって敏感に感じ取られるに違いない。家族の同席視聴も当たり前だと考えるべきである。

以上のような事柄を踏まえ、本論考では「現状において選択可能な、最善の策は何か」という解決案に焦点を絞って以下、考察を進める。

2 オンライン・リアルタイム講義形態の導入

2.1 学生も教員も孤独：暗中模索の時代へ

感染症への恐れから大学へ通えぬのみならず外出も憚らねばならない青春を、我々教員の誰もが経験していない。それゆえ、猛勉強して合格を果たし親元を離れた新入生の心中はいかばかりであったか、想像するより他はない。将来への不安、経済的困窮、先の見通しがたたぬ「正解」なき日々。そのような新入生が、通年と比べ遥かに unstable で unhappy な精神状態で講義に臨むというのに、それを統べる教員の苦悩と重圧もまた、おそらく誰にも理解されない。

思うにコロナ禍は日本の教育界の誰もが想定外の短期間に、もはや後戻りはできない劇的な改革を惹起してしまったのである。東京オリンピックがなくなった令和 2 年は、1918 年（大正 7 年）の大学令によって確立された学制以降、まさに開闢以来と呼んでも過言ではないオンライン教育始原という世紀的な節目の年になるであろう。衝撃や摩擦が大きいことはある意味不可避であった。

しかしながら、このような不測の緊急事態を招いたのはコロナである。コロナウィルスこそが元凶なのであるから、多少躓いても誰を責めることもなくコロナのせいにできる。先例もない上に学則も大きく変わろうとしている今、おそらく 10 年は一気に進んだに違いないデジタル時代の針に、手巻きのものを合わせるしか活路はないのではなかろうか。

そう考えた筆者は 4 月から（本務校を含む）英語と人文系の授業、前・後期総計 18 コマ全てをオンライン・リアルタイムで行うことに決めた。年間およそ 1000 名の学生との間で少しでも生のやり取りに近い手応えを得るにはこれしかないと思ったからだが、当初は遠隔講義に関して日本語

のネット記事も限られたものであった。パソコンの扱いすら不得手な自分にとって無謀な試みであり、情報系に強い友人は誰もが多忙な様子だったので、普段のように気軽に相談するわけにもいかない。黄金週間後に初回の講義が無事終わった時は、そこがスタート地点でありながらゴールイン直後のような酸欠状態だった。ただ、徒手空拳の個人でもその気になればリアルタイム講義を始めることが可能であった点だけを強調しておきたいのである。

2.2 プラットフォーム選択

4 月以降現在（2020 年 10 月末日）まで筆者が継続して使用しているのは、Cisco Systems 社がリリースしている Web 会議ツール「Cisco Webex Meetings （以下、Webex）」で、主催者（教師）が開催する、クラウド型多地点接続会議サービスである。大学での遠隔授業が春先に確定した際、ビデオ会議システムとしては世界トップシェアの Webex を選べば、英語なら世界からの報告例が極めて豊富にリサーチ可能であったからだ。始めにはっきりとお断りしておきたいのだが、Webex の使い勝手は決して万全とは言えない。しかしこの半年で進化してきている。従って利用者増に伴い、今後も更に便利な機能が追加される余地は十分にある。

2.3 事前準備：３つの注意点

個人で Webex を使って授業をリアルタイムで行う場合、準備段階が最も肝心で、その流れのポイントは以下の３点に集約される。

1 つ目は、主催者として Webex サイトに入り、講義別にヴァーチャル教室を設定することである。学年暦から講義日程を半期分登録する。受講者については名簿をもとにメーリングリストを作成し、ミーティングの「参加者」として事前に入力しておく必要がある。ミーティング設定後に不備・追加などがあった場合は後で編集することも容易であるが（通常、着信音と共に）変更通知が全学生に届くので、最初に慎重に設定することが望ましい。通常講義であれば「週ごとの繰り返し」に設定しておき、休講などの場合は「今回限りの変更」でキャンセルすればよい。

2 つ目に大事な点として、受講生に前もって（筆者は約 1 週間前に行ったが）オンラインでのリアルタイム講義形式である旨を告知すると同時に、ミーティング参加の方法を別途、メール等で知らせておかねばならないことだ。Webex 上の受講者メーリング・リストは、予め「メモ帳」などで作成しておきコピペで一括入力できるが、一人の遺漏も許されないので確認作業は欠かせない。

全ての設定を終了し設定ボタンを押すと受講者全員に自動的にミーティング招待メールが送られる。時間になったら「参加」をクリックするだけの簡易さなので、皆が定刻前にログインを済ませており、事前に混乱はなかった。google カレンダーに同期すれば毎週のリマインダー（会議、即ち授業前予告）がデフォルトで設定されるので、うっかり忘れることも少なくて済む。

3 つ目、これが最も肝心であるが、教員は授業開始前に全ての機能に習熟しておかなければならない。UI（ユーザー・インターフェイス）がシンプルなのはいいが、逆に初心者は操作面で多少苦労するかもしれない。筆者は家族に協力を依頼し、架空ミーティングにて実際の講義開始前に試行

錯誤を繰り返した。

図 1 はクラスを設定した際に現れる画面である。

図 1　Webex のミーティング設定画面（1 クラス分）

2.4　Webex を選んだ理由

2.4.1　長所：安全性、利便性、収容人数など

Webex を選んだ第 1 の理由は、まず安全性である。Zoom Video Communications 社の Web 会議ツールである Zoom を最初に考えたがセキュリティ面での若干の脆弱性が話題になっていた（現在は修正済みとされている）。その点 Webex は上述のように世界で最も利用されているビデオ会議プラットフォームであるのみならず、クラウド型であるにも関わらずセキュリティが強固であった。ユーザー情報の保護に力を入れており、メッセージやホワイトボードの内容まで、あらゆるデバイ

ス間で“暗号化”がなされている。

第２に、コンピュータに不慣れな者でも取り組みやすく、招待しさえすれば誰でも容易に受講できる点が挙げられる。Webex を利用することにより、全ての参加者（履修学生）の入退室記録及び参加時間総計が残る。(Excel ファイルなどの書式に対応可。参加者の記録は 3 か月間保存される。) これによって出欠点呼は基本不要となり、時間の節約という点でかなり助かる。本務校で学生の保護者から問い合わせがあった際は、出欠状況、何分遅刻、何分総計で受講したかを即答できた。各ミーティング参加者には数時間後に MP4 で録画されたミーティング・コンテンツを受講者全員に自動送付することも出来る。講義に出席（参加）できなかったり、内容を見直したりしたい学生にとっては便利な機能であろう。急にオンデマンド授業に変更せざるを得ない場合でも、Webex で個人講義を行い、自動録画を履修生に転送するだけなので簡便である。

第３に、利用人数という点で融通が利くところである。無料アカウントを使用する場合、Zoom における同時接続数の上限は 100 名までであり、それを超えると収容可能人数は 500 名になる。その際に契約料も一気に跳ね上がるため、個人契約で学生を受け持つ身であれば 100 名の次に 200 名枠の設定がある Webex が便利である。

2.4.2 短所

当初は使い勝手が皆目わからなかったため「無料お試し会員」を選択した。ネットの情報を見た限りでは正会員との大差はないらしかった。しかし 6 月になって現在の無料サービスはまもなく終了するという通知が来たため正会員として契約をした。開始時の無料クラスをそのまま移行・継続することは出来ず、新たにクラスを組み直し、ミーティング番号も変更されたものを学生に再通知せねばならなかった。それが分かっていたなら、面倒を避けるため最初から会員になっておく方がよかったと後悔した。また、申し込みをした時点では明記されていなかったが、受講者が 100 名を超える場合、5 口、即ち 5 名の教員（主催者）分のライセンスからの契約となっているので、年間 18 万超を個人で支払わねばならない。トラブルシューティングのマニュアルが機械翻訳らしく英語の対応例にあたる方が確実である。また、ごくまれにだが通信障害も起こり得る。

3 学生の意見を講義に反映させる工夫

3.1 マイクでのやり取りと Chat 機能

マイクでのやり取りと Chat 機能は最も利用度と価値の高いものだと言えよう。講義開始前はチャットで挨拶を送りマイクで音量を調節しつつ数名の学生とやり取りをする。その後も、学生は授業中にマイクをいつでもオンにして発言できる。講義が始まったら、こちらが気づいた時に学生からのチャットメッセージを読み、反応を常に確認している。チャットには「全員」「プライベート」という、メッセージを送付する相手を学生、教員それぞれに選ぶ機能があるので、内容に応じた個々の対応を行っている。先述の録画視聴の際にもチャットが全員向けの場合、交信内容をフォローすることが出来る。音声具合や講義内容について確認のために尋ねると学生は即座に返事してくれる。

3.2 投票機能と“いいねサイン”（「反応」と表記される）の登場

Webex には投票用の機能があり、それを使えば学生に単一もしくは複数選択肢から回答させ、その場で結果を表にして示すことも可能である。この投票機能を用いて当番制などを決定したため、学生は自分たちの意見が反映されたことに納得・満足して、その後の講義に取り組めた。また、ホワイトボード機能を用いて双向の意見を同時に記入することが出来るので、ただ講義を視聴するだけでなく、学生がグループワークの結果をクラスに提示する際に、アクティブラーニングの成果をシェアするのに大いに役立つ。同様に、学生が自ら用意したファイル資料を共有することもボタン一つで容易にできる。以下は初めて学生が自由にホワイトボードで落書きを書き出した瞬間を保存したものである。ありがとう、とか、がんばるよ、などの文字が見える。テキストメッセージや図形としても書き込めることは図 2 に示す通りだが、手書きの方が味わいがあるだけでなく、視覚に訴えるインパクトも強い。（心理学的には、判読しづらい文字を解読する努力は記憶力の持続に有効であるという説もある。）

図 2　Webex で保存できるホワイトボードの記録

また 2020 年秋には、図 3 に示す「反応」というサイン表示の機能が追加された。これは従来の投票機能における準備が不要であり、即座に全参加者の反応が把握できる便利なシステムである。学生はこれらを使う事に心理的抵抗がなく反応が早い。多数決の場合は両端の指記号を使用する。

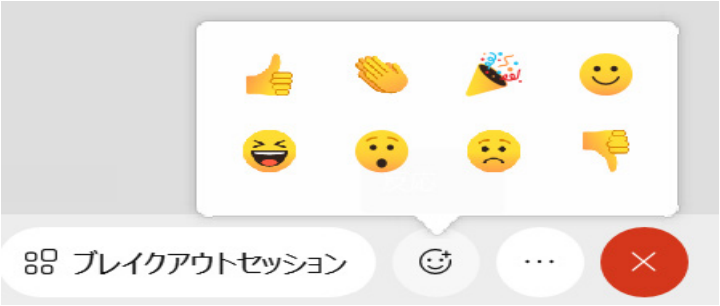

図 3　Webex に新しく追加された「反応」表示用の選択肢

3.3 反転授業

反転授業とは、特に今世紀に入ってアメリカで急速に広まった試みで、国内でも東京大学や静岡大学を始めとする幾つかの大学が積極的な取り組みをしている。従来の文系講義では、学生は粛々と聴講し学習内容に応じて与えられた課題を提出するという形態が殆どであった。そうした従来の授業形態をまさに「反転」させるもので、在宅でいわゆる「授業」を映像教材にて予習の形で受講を済ませ、対面授業の時間に、通常「宿題」として扱われる演習や、学習内容に関わる意見交換などを行う。指導内容次第であり、学生が如何にそれに反応するかは教員の力量に依るところが大きいため、最悪の場合は無反応を引き起こしてしまうリスクはある。そこで、当該講義に於いては従来型との折衷案を取ることにした。講義時間の 2/3 を従来型の教科書中心の講義、残り 1/3 をグループセッションに充てることにした。以下は講義の導入部で使うパワーポイントの 1 例である。

図 4　毎回作っているパワーポイント（図は後期第 3 講目のもの）

シャルコーマリートゥース病、最高裁判事（ルース・ベイダー・ギンズバーグ氏の死とその後継者）、アメリカ大統領選予測等を導入部の話題にし、講義でシリーズ化している音声学的発音のコツと文法（この回は「仮定法」のまとめ）について解説した。

前期は、学生の小グループをチャット上で作り、連絡先（ライン等）を交換してもらい、英語テキストの内容を 4～5 名のチームごとに発表させたが、極めて良質なプレゼンを見事にこなした。（下の図 5 の前期アンケート結果から、学生の満足度が高いことが窺える。）

後期は初回から学生のグループワーク（Webex では「ブレイクアウトセッション」という）として会話練習の時間を設けたところ、どのグループもロールプレイを積極的にやり、真面目に課題に取り組んでいる。こと語学に関してはランダム・ペアによる pattern practice は非常に有効と言える。

上記回答への補足や・気付いたこと・授業に関する意見があれば書いてください・
この授業は非常に面白かったです・オンライン授業で・同級生と交流が持ちにくいなか・この授業でプレゼンテーションをする活動を通じて交流を持つことができ感謝しています・
ありがとうございました・
授業形態はとてもよかったです・授業内容に関しても・とてもよかったです・大学には行っていませんが・対面でやっているような感じでした・
同じクラスの学生と一緒に作業して発表するという形式で楽しく授業を受けることができました・教科書の内容や興味のあること・疑問点などについて詳しく調べ・知識が増えたと思います・
授業中の雰囲気がとても明るく毎回の授業が楽しみでした・ありがとうございました・
楽しかったです・ありがとうございました・

図 5　2020 年前期にリアルタイム講義を受けた学生の九大基幹教育院実施アンケートの感想（自由記述欄より）

グループ活動が始まった後は、概ね学生の自主性に任せているが、活発、かつ真剣にやり取りをしていて、たまに覗きに行くこちらが驚くほどである。知的刺激に飢えているのかもしれないと思う。次なる密かな願いは、グループ全員が大笑いしている場面にオンライン上で偶然出くわすことである。もう十分すぎるほど苦しんだのだから、たまに少しぐらいふざけてみたっていいのである。コロナ禍以前は、どれほどこちらも彼らの笑顔や笑い声に心癒されてきたことだろう。

4 活き活きとした学びの継続のために

4.1 自由にパスを回しあえる関係を

メールの迅速な返答はおおむね歓迎される。しかし実際問題として遠隔授業で急増した学生メールへの対応に例年以上に苦慮した教員は少なくないと思われる。教材研究、パワーポイント作成やビデオの録画等に追われる一方で本来の研究もおろそかにはできないため、土日祝日を潰してもなお時間が足りない。だが、反転授業のコンセプトを拡大し、「学生が自主的に課題を発見し、相互に教えあう」態勢作りが、リアルタイム講義では実現できる。それによって（直接教師にウェブ会議の入り方などのノウハウを尋ねるのでなく）仲間同士で相談しあって解決できることも多いと思われる。前期は学生チームによる質の高いミニプレゼンを初期目標として目指した。学生はまず自己紹介をしてグループにおける役割を決める。その過程でラインなどを交換しあい、講義時間外にも相談できる繋がりが出来たようである。実際にプレゼンをさせると、教員単独で 1 時間半喋っていた内容とは異なる斬新な切り口が新鮮な発見をもたらしてくれた。後期はこの秋から導入された「ブレイクアウトセッション」という新機能を導入し、英会話練習を 4〜5 人で組んで実施したり、クイズを一緒にしたりする場も設けている。グループセッションには教員としてたまに会話練習に加わり、気づいた時に発音矯正などを行う。前期の講義への感想では 2 クラスともグループワークとその成果への言及が多かったが、本当のところは、友人を作るきっかけを彼らは何より望んでいるのではなかろうか。双方向性という概念の目指す先は、教師と学生間に限らず学生同士の活発なやり取りを育むものでなければならない。

4.2 Moodle 利用と成績評価について

Moodle は成績決定に重要な役割を果たしている。本講義の最終目標は英語力を伸ばすことなので、前期のテキストは全章を終えた。講義終了間際に行う復習用小テスト及び総括テストが重要な意味を持つ。前期はコロナ禍で入学早々大学にも来られない学生が 1 日中 PC に向かう姿を想像して、質量ともに厳しい task を与えるのもどうかと思い、比較的解きやすい問題を毎回出題した。ほぼ全員出席で、真剣に聞いて満点が続く、という状態だったため成績を出す際は多少悩む羽目になった。後期はその反省を踏まえて若干難解なテストにしたら、制限時間内に提出できない学生が出るようになり、難度や受験時間に幅を持たせる調整をした。丁度ほどよい塩梅に平均値を設定するのは、このように難しいものである。前期 2 クラスは 100%に近い出席率をキープした。講義では最後の回まで集中を欠かないよう、毎回の Moodle 小テスト（130 点満点）に加えて 40 点の最終総

括テストを実施する。発表等の平常点で 30 点、最終的には 200 点満点を半分に割って成績を出す。

4.3 フラッシュカード系アプリの活用

入学時の英語力（単語力）をキープしたいと思う学生が多いのは当然である。ここ数年、利用価値があると注目しているのは Quizlet や Anki という、基本は無料のソフトである。アプリはダウンロードすれば PC だけでなくスマートフォンでも活用でき、学生負担は実質ゼロにできる。（Anki を個人でスマホに同期する場合のみ有料となる。）Quizlet 利用にあたっては主催者である教員として年額 5000 円程度を払っている。これを利用してリアルタイムの単語ゲームを競い合うことにより、学生の有志が戦う姿を他の学生が見守ることも出来るし、自宅学習で密かにマッチング記録に挑戦したりもできる。利用制限は一切ない上に、パスワードで情報共有に制限をかけられる。負けん気の強いゲーマーがクラスに数名はいるのでデモで一度解いて見せるとその記録をすぐに破る猛者が現れて毎回楽しみな展開となる。クイズの問題は学生が編集者となって新たに作問（加筆修正）することも可能である。Moodle の小テストはこのフラッシュカードと連動させている。成績に直結する Moodle で満点を取ることを目標に、楽しみつつ Quizlet を予習しておくと、本講義でのテキスト解読の一助にもなる。出来る学生は、平均的な学生向けに教員が準備する Quizlet をパスして、より高度な学習キット Anki を使って Moodle の各テストに取り組んでもよい。

以下は、Quizlet のフラッシュカード一枚目の画面である。単語カード、学習、筆記、音声チャレンジと、順にこなせば相当な練習量となり、記憶も定着しやすい。

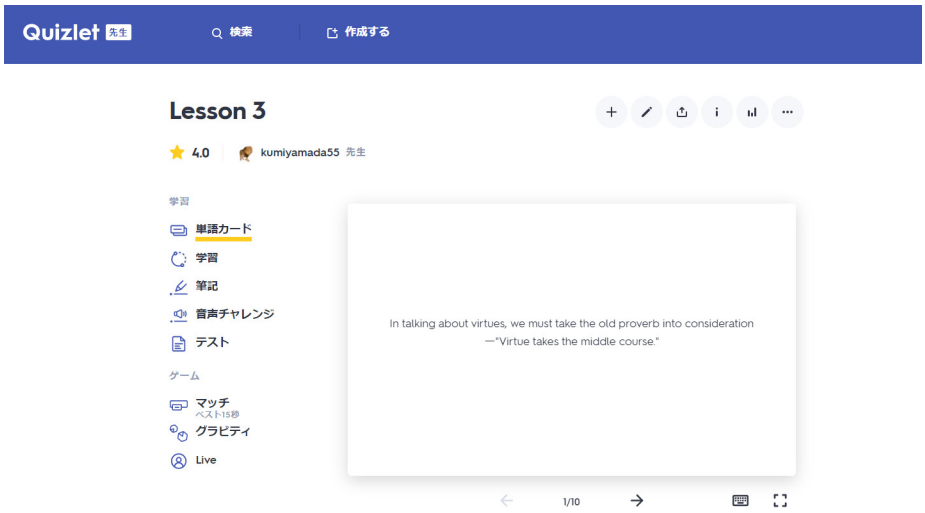

図 6　Quizlet 最初の画面

5 成果と分析・考察

2020 年春のアンケート回収率を見ると、担当した 2 クラスはそれぞれ 96.4%、93.1%（＊全体平均 72.5%）であり、出席率より下回っているものの学生の関心が最後まで持続していたことを示す。

『ファクトフルネス』(2019) を著したハンス・ロスリングは言う。「人は、何かの項目をずらりと並べた時、どの項目も同じくらい重要だと考えがちだ。だが、多くの場合はそうではない。むしろいくつかの項目が他のすべてを合わせたよりも重要になる。」

筆者はこのロスリングの意見に賛同する。例えば、次の表は 2020 年度前期の学生評価アンケートの結果で黒の折れ線が著者の「学術英語 A・レセプション」への評価である。チャート項目の中で全て平均値を上回っていることより、落差の大きな 3 項目に着目したい。「共 15」の項目、『グループ討論に主体的に参加した』、「共 34」＝『グループで相談しながら課題を解決するスキルが向上した』「共 71」＝『教員はこの授業における新しい概念について自分で調べることを奨励した』という 3 項目で点が高かったことは、当該リアルタイム講義の初期目標が達成され、そして学生間の交流を促進させるグループ活動がそれなりに評価されたということを示している。これまでのところ応分の成果を得ていると言えるのではないか。

単純集計 [表]

番号	カテゴリー	項目	5 (人)	(%)	4 (人)	(%)	3 (人)	(%)	2 (人)	(%)	1 (人)	(%)	担当講義	科目群平均
共-12	学修レディネス	この授業を履修する前の段階で，授業内容に関心を持っていた	16	29.6%	10	18.5%	15	27.8%	12	22.2%	1	1.9%	3.5	3.2
共-15	主体的学修	グループ討論に積極的に参加した	12	22.2%	26	48.1%	10	18.5%	4	7.4%	2	3.7%	3.8	2.9
共-24	幅広い視座	様々な分野をもっと勉強しようという気になった	15	27.8%	23	42.6%	10	18.5%	5	9.3%	1	1.9%	3.9	3.5
共-34	汎用的技能	グループで相談しながら課題を解決するスキルが向上した	21	38.9%	20	37%	9	16.7%	1	1.9%	3	5.6%	4.0	2.8
共-51	学修デザイン	シラバスの学習目標は明確だった	15	27.8%	25	46.3%	12	22.2%	2	3.7%	0	0%	4.0	3.8
共-54	学修デザイン	教員は，毎回の授業で，どのように学習を進めればよいか明確に指示した	28	51.9%	20	37%	3	5.6%	1	1.9%	2	3.7%	4.3	4.2
共-67	インストラクション	教員の説明はわかりやすかった	31	57.4%	19	35.2%	3	5.6%	1	1.9%	0	0%	4.5	4.0
共-71	ファシリテーション	教員は，この授業における新しい概念について自分で調べることを奨励した	31	57.4%	17	31.5%	5	9.3%	1	1.9%	0	0%	4.4	3.6
共-77	評価とフィードバック	教員は，適切なタイミングでフィードバックをくれた	24	44.4%	17	31.5%	11	20.4%	2	3.7%	0	0%	4.2	3.7
共-81	授業者の特徴	教員は，授業に対して熱意を持っていた	37	68.5%	14	25.9%	2	3.7%	0	0%	1	1.9%	4.6	4.1

A.単純集計 [グラフ]

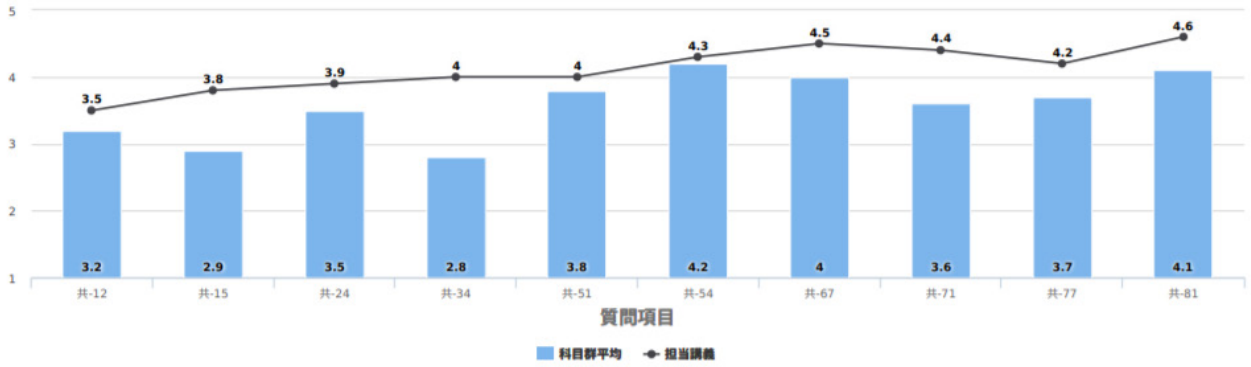

図 7　[基幹教育]2020 年度前期・夏学期授業アンケート：Questionnaire for KIKAN Education Courses, First Semester and Summer Quarter, 2020　当該科目分より抜粋

始めに述べたように、遠隔授業には学生にとっていわば「省エネルギー」的なプラス面もあることは確かである。オンライン・リアルタイムで教えることには生のやり取りに伴うある種の気楽さと、1 対 1 の親近感を受講者に持たせることができるというメリットがある。特に語学関係においては、(英会話教室の繁盛ぶりを見てもわかるように) man-to-man 指導によるライブ感を受講生が潜在意識下で求めている事は重要なポイントであるので、オンライン指導の方がどちらかと言えば従来の教授法より優れている点も見逃すことはできない。

しかし、ここで肝心なことは大学という知の磁場における受講、様々な精神的、肉体的な交流、学術的便宜を希求する想いが根本的には満たされてはいない学生が、実際にはかなりな数にのぼる

のではないかと推察されることである。三密を避けるため遠隔講義形式に仕方なく「慣れて」きたとはいえ、画面上のやり取りはあくまでも淡く、促しても顔を画面上に出したがらない者がほとんどである。講義が終わっても教室に残って雑談を続ける熱気にはほど遠い。

いかに各オンライン・プラットフォームが進化し続けようが、それに生命を吹き込めるのはあくまでも使う側の「生身の人間」であって、双方向性というのは、互いにボールを投げ合わないことには成り立たたないものなのである。教室にいれば冗談を言った後に『あ、外した。』などと瞬時に察知できるが、今はパソコン上の反応が鈍い時間があれば実際以上に長く感じる。苦労したけれどリアルタイム講義を選んで良かったなと思うのは、呼び掛けると数名の学生が同時にマイクをオンにして明るく応じてくれたり、愉快なチャットをピンポンのようにやり取りしたりする時だ。仮にボールが宙に浮いているような状態でも、なんとかそれを受けようとする気持ちの強さを教員と学生双方が持っていなくてはならない。対面授業や「密」が当然であった頃よりも学びにおける忍耐と真剣さが、より問われることになるのである。

結び

コロナ禍は必ず終焉を迎え、近い未来に我々は再び教壇に立つ。その時、元の教授法を取り戻すだけでなく、どれだけ現在の苦労と経験をそこへ反映させることが出来るかが問われるだろう。

筆者の脳裏には、この 4 月から一貫して理想とするロールモデルがあった。それは長年お世話になってきた NHK ラジオの語学番組や大学受験講座の講師イメージである。様々な学習講座が半世紀を超える長きにわたり貴重な知識と情報を電波にのせて届けてくれた。いつもラジオの時間を楽しみに耳を傾けていた昔の自分は、受験生として眠い目をこじ開けて早朝の机に向かった日もあれば、背中に寝つきの悪い赤ん坊を括りつけていたこともあった。ラジオの向こうで大勢のリスナーがそれぞれの環境において懸命に、自発的に学習してきたように、今は PC 越しに血の通った人間が大勢いると考えよう。音だけが頼りであった昔と違い、一人一人の学生の顔は工夫次第で以前の大教室よりも見えやすい環境になっている。本に埋もれた研究室から教員が語り、学生はそれぞれの自室で聴く。彼らに直接語り掛け、彼らを結び合わせ、個々に反応できる時代が到来したのである。それだからこそ不安に思う学生への対応を決して蔑ろにしてはならない。

以下は、NHK ラジオ「やさしいビジネス英語」（「実践ビジネス英語」の前身）、1991 年 11 月号に、担当されている杉田敏先生が書かれた巻頭言（はじめに）から拝借したものである。

●自分のやっていることは重要か。
●この職場にいる必然性はあるか。
●この職場で何らかの目標をたてることができるか。
●ここにいることで人生が豊かになるか。
●ここで何かを身につけることができるか。

（中略）paradigm [pǽrədàim] というのは聞きなれない語かもしれませんが、もともとは

ギリシャ語で、pattern の意です。（中略）新しい世界観に基づく新しい行動のパターン、まったく新しいものの見方のための枠組みという意味があります。

過去の習慣や routine から思い切って決別し、パラダイムを大胆にシフトすることによって、今まで見えなかったものが見えてきたり、可能性が開けてきたりすることがよくあります。（後略）

30 年も前に米国で paradigm[1] という言葉が“バズっていた”事実は興味深いことである。今回、このコロナ禍が契機となった大いなるパラダイムシフトにより、今まで見えていなかった何が見えてきたのか。我々は、これからどんな可能性の扉を開くことができるのか。令和という時代に、大学を学びの場とする全人が同じ問いを今再び与えられているのではないだろうか。

最後に、一日も早いパンデミックの終息と、学生一人一人が人生に於けるこの稀有な艱難の機会を、何か大切なものを得る魂の糧にしてくれるよう切に祈る。

注

[1] 1962 年に paradigm shift（パラダイム・シフト）という言葉を使ったのはトーマス・クーンで、その後援用された多くの事例で彼自身が意図した限定的な用語との乖離が生じている。

参考文献

Jane, M. *Introduction to Teaching with Webex*. Ulysses Press, 2020.

Kuhn, Thomas S. *The Structure of Scientific Revolutions*. U of Chicago P, 1962.

大橋完太郎.「大学の『身体』は変容する」『現代思想』10 月号, 第 48 巻第 14 号, 青土社, 2020, pp. 93-101.

佐藤浩章.「ポスト・コロナ時代の大学教員と FD：コロナが加速させたその変容」『現代思想』10 月号, 第 48 巻第 14 号, 青土社, 2020, pp. 75-84.

佐藤郁哉, 吉見俊哉.「知が越境し、交流し続けるために：大学から始める学び方改革・遊び方改革・働き方改革」『現代思想』10 月号, 第 48 巻第 14 号, 青土社, 2020, pp. 8-20.

芝池宗克, 中西洋介.『反転授業が変える教育の未来：生徒の主体性を引き出す授業への取り組み』. 明石書店, 2014.

静岡大学情報基盤センター.『反転授業オンライン教育実践マニュアル：静岡大学オンライン教育推進の軌跡 2007~2018 年』. 静岡学術出版, 2020.

杉田敏.『NHK ラジオ：やさしいビジネス英語』11 月号, 日本放送協会, 1991, 11, p. 4.

ハンス・ロスリング. 他『ファクトフルネス』上杉周作、関美和訳, 日経 BP マーケティング, 2019, p. 175.

両角亜希子.「大学経営の今とこれから」『現代思想』10 月号, 第 48 巻第 14 号, 青土社, 2020, pp. 46-57.